

# 信 毎 俳 壇

## 神野 紗希 選

- 夏雲やだいだらぼつち喰ふ鯨  
(佐久市) 竹内 勝代
- むせながら乳飲む仔山羊夕涼し  
(松本市) 中村 百仙
- ボブラきらきら君へ誕生日のメール  
(安曇野市) 小坂るり子
- 冷やし蕎麦木曾の大橋渡り来て  
(岡谷市) 吉池富貴男
- 突出しは笹舟に寄せ夏料理  
(箕輪町) 向山 政俊
- 水俣の丘の墓標よ草茂る  
(小海町) 井上 英一
- 鎌の刃のひやりと蠟燭の転び出す  
(中野市) 石田 一石
- 鈍足の台風メダル無き日常  
(塩尻市) 神戸 千寛
- 梅雨寒に蘇鉄の巻き葉はくれ初む  
(埴田町) 由井 寛男
- 汗引かぬ野良着のままで昼の夢  
(長野市) 神谷 伸一
- 佳作  
鳥渡り田の空青し粟の花  
(長野市) 野 菊
- あおぶとうしさんもうとうらんぽと  
(松本市) 小林 惟玄

一句目、幻想的な場面は、夏雲の比喩とも、原初の自然の混沌とも。だいだらぼつちは国造りの神話の巨人。その巨軀を呑む鯨も、神話の壮大さで悠々と空を泳ぐ。二句目、ほとぼしる母乳と、乳を

欲る山羊の仔と。夏の暑さが和らいだ夕暮れ、涼しい風に生命力がみずみずしくぶつかる。三句目、輝くボブラはきっと若葉青葉をゆたかに茂らせる。お誕生日おめでとう、心をこめたメールは届く。

## 坊城 俊樹 選

- 少年が少女に渡す蜚かな  
(松川村) 岡 豊村
- 水田に猿飛佐助水馬  
(長野市) 福沢健太郎
- 揚羽の子灼けた舗装に出る旅か  
(伊那市) 小松 小夏
- 三味の音の乾くばかりの虎が雨  
(埴田町) 川崎 彰典
- 漆黒の城を焦がすや大西日  
(松本市) 小林 幸平
- 朝顔の墓の行く先空ばかり  
(佐久市) 水間喜美子
- 夢いつも置いてけぼりや明易し  
(佐久市) 西田 和彦
- 真つ裸童はじける山の川  
(大町市) 丸山めぐみ
- 麦秋の村々寧に飯田線  
(長野市) 栗津原吉弘
- さつた峠富士雷つりに雲の峰  
(埴田町) 由井 寛男
- 佳作  
梅の美に竹串やはらかに使ふ  
(佐久市) 飯島八代恵
- 空仰ぎ遺品の日傘たたみけり  
(長野市) 斎藤 俊幸

一句目、これは少年の少女にたいする恋心ではなからうか。苦勞して捕った蜚をあげる。彼の一番大切な宝物を渡すように。二句目、「猿飛佐助」は真田十勇士の一人。忍術を使う。水馬もまた水

田の水面を忍者のように飛翔するのである。三句目、蛹から羽化してまだ幼い揚羽蝶の子ども。都市部のど真ん中に生まれてしまった。灼けたアスファルトの上を旅立たなければならぬ定め。

## 今井 聖 選

- 清水湧くカフェに清々しきトイレ  
(須坂市) 東郷賀代子
- 洗車終へ床屋も終へて更衣  
(長野市) 宮沢 信博
- 更衣手作り味噌の鼻に染む  
(長野市) 武田 芳子
- 梅雨夕焼この世でビール飲みにつけり  
(中野市) 田川 寿男
- 燕の子糞こぼす時向き変わる  
(小海町) 依田 久代
- 夏シャツに紅一点のチリソース  
(松本市) 伊藤 和夫
- 究極と経過の狭間夏の秋  
(飯山市) 田中 琢雄
- 梅雨寒や小さき鏡に老の顔  
(南相木市) 猿谷 秀
- 洋館のボーイソプラノ濃紫陽花  
(長野市) 鎌田 隆晴
- 沖繩忌丸薬弾む夜の床  
(松本市) 森山 昌子
- 佳作  
風と入る一匹の蠅一茶館  
(千原町) 清水 渡
- 草の花少年だけが知る老翁  
(熊本市) 夏風かをる

一句目、トイレ（廁・便所）の句で成功する句はあまり無い。「排泄」は大切な本能なのに。この句、「清水湧く」と「清々しき」がタッグを組んでトイレに対抗した。二句目、更衣の朝、洗車をして床

屋に行った。3種の行為がそれぞれ新鮮。三句目、更衣は社会的な行事。手作り味噌は個性の創出。二つの逆の方向性を一日にまとめた。四句目、ああ、ビールという飲み物に出会えて良かったという感慨。